

タイトル	エルンスト・トレルチにおける「歴史化」の概念
著者	安酸, 敏眞; 塩濱, 健児; YASUKATA, oshimasa; SHIOHAMA, Kenji
引用	北海学園大学人文論集(54): 83-120
発行日	2013-03-31

# エルンスト・トレルチにおける「歴史化」の概念

安 酸 敏 眞・塩 濱 健 児

## はじめに

エルンスト・トレルチの晩年の理論的な仕事は、もっぱら「歴史主義」(Historismus)の問題の解決に向けられており、『歴史主義とその諸問題——第一巻 歴史哲学の論理的問題——』*Der Historismus und seine Probleme, Erstes Buch: Das logische Problem der Geschichtsphilosophie* (Tübingen: J. C. B. Mohr [Paul Siebeck], 1922) は、まさにその偉大な記念碑というべき著作である。この大著においてトレルチは、「歴史主義の克服」という課題に果敢に挑み、そのことを「歴史によって歴史を克服する」(Geschichte durch Geschichte überwinden)<sup>1</sup> という意味深長な言葉で言い表したと見なされている。しかしこの有名な言葉が実際に何を意味しているのか、またもしトレルチが「歴史主義の克服」を目指していたことが事実であったとしても、果たしてそのことが何を意味していたかということとは、決して自明な事柄ではない。否、むしろこれらの事柄は究明されるべき難問として、現在のわれわれの前に立ち塞がっているのである。

ところで、トレルチが歴史主義の問題に関心をもつようになったのは、なにも一九一五年にベルリン大学哲学部教授に就任してからのことではない。キリスト教神学の学徒としての歩みを始めた最初期から、彼は歴史主義の問題に深い関心を寄せている。実際、トレルチは最初期の長編の論文

---

<sup>1</sup> Ernst Troeltsch, GS III, *Der Historismus und seine Probleme. Erstes Buch: Das logische Problem der Geschichtsphilosophie* (Tübingen: J. C. B. Mohr [Paul Siebeck], 1922), 772; KGA 16, 1098.

「宗教の自立性」において、「あらゆるものを相対性へと変える歴史主義の漫々たる水」(die Wasser des alles in Relativitäten verwandelnden Historismus)<sup>2</sup>についてすでに言及している。われわれの見るところでは、おそらくこれがトレルチにおける「歴史主義」(Historismus)という用語の最初の用例ではないかと思われるが、われわれがベルリン時代の成熟したトレルチの定義にしたがって、「歴史主義」を「精神世界についてのわれわれのすべての知識と感覚の歴史化」(die Historisierung unseres ganzen Wissens und Empfindens der geistigen Welt)<sup>3</sup>、あるいは「人間とその文化や諸価値に関するあらゆるわれわれの思惟の根本的歴史化」(die grundsätzliche Historisierung alles unseres Denkens über den Menschen, seine Kultur und seine Werte)<sup>4</sup>として捉えるならば、「歴史主義」として表面化してくる論理的問題は、すでにトレルチの学者人生の出発点に横たわっていたことがわかる。

そのことを実証するために、本稿ではトレルチにおける「歴史化」の概念を可能な限り洗い出し、それらの用例についての批判的概念の分析を通じて、上述したトレルチの有名な言葉の解明に少しでも役立つ洞察を、あわよくば引き出してみたいと思う。換言すれば、「歴史化」の概念の分析を通じて、トレルチにおける「歴史主義」の問題にアプローチする新たな方途を見出すことが、本稿の目的とするところである。

—

トレルチは一八九五年の『十九世紀の神学の歴史的基礎』において、す

---

<sup>2</sup> Ernst Troeltsch, „Die Selbständigkeit der Religion,“ *ZThK* 6 (1896), 208; KGA 1, 524.

<sup>3</sup> Ernst Troeltsch, „Die Krisis des Historismus,“ *Die neue Rundschau* 33, I (1922), 573; KGA 15, 437-438.

<sup>4</sup> Troeltsch, GS III, 102; KGA 16, 281.

でに歴史発展を重視する新しい「歴史化する考察」(historisierende Betrachtung)<sup>5</sup>について言及している。一八九六年の学界展望「宗教哲学と神学的原理論」においては、「今日の思考の歴史化する発展理論的方向」(die historisierende und entwicklungstheoretische Richtung des gegenwärtigen Denkens)によって、あらゆる理想的確信や諸宗教に対して突きつけられている「焦眉の問題」として、「われわれの発展史的思考から帰結する相対主義と絶対的価値との対立の問題」(Problem absoluter Werthe im Gegensatz zu dem aus unserem entwicklungsgeschichtlichen Denken folgenden Relativismus)が挙げられている<sup>6</sup>。たとえば一八九七年の「キリスト教と宗教史」という論文において、トレルチは「近代的思考の歴史化する精神」(der historisierende Geist des modernen Denkens)<sup>7</sup>に言及しつつ、以下のように述べている。

十八世紀が依然として躊躇しながら、そしてすべてにおいて不変の理性的真理を探求しながら、あらゆる宗教において、しかしとくにキリスト教において、「自然宗教」をあげめながら開始したものを、十九世紀はますます成功裡に、そしてまったく計り知れない広がり方で継続した。この世紀は、われわれが手にし得るこの歴史的生成の断片を、その内的運動において指し示し、そしてこの断片の前方と後方に横たわっているわれわれの知らない部分に対しては、想像力を掻き立てて滔々と無限に流れる変化というイメージを描き出すことによって、

---

<sup>5</sup> Ernst Troeltsch, *Die historischen Grundlagen der Theologie unseres Jahrhunderts* (Karlsruhe: Druck von Friedrich Gutsch, 1895), 11; KGA 1, 546 (資料番号 30).

<sup>6</sup> Ernst Troeltsch, „Religionsphilosophie und theologische Principienlehre,“ *Theologischer Jahresbericht* 15 (1896), 394; KGA 2, 111 (資料番号 31).

<sup>7</sup> Ernst Troeltsch, „Christenthum und Religionsgeschichte,“ *Preußische Jahrbücher* 87 (1897), 423; GS II, 336 (資料番号 32).

人々の生活を歴史的生成のせわしない流れ、つまり絶え間ない変化のうちへと解消した<sup>8</sup>。

ペーロの『新しい歴史学的方法』とリッカートの『文化科学と自然科学』を論評した一八九九年の書評においては、「宗教的規範真理の獲得に対して歴史化的な把握から生ずる困難」<sup>9</sup>について語られ、リッチェル学派の重鎮ユーリウス・カフタンを論駁した同年の論文「歴史と形而上学」では、いまや歴史主義についてより明示的な仕方で、次のように述べられる。

歴史主義は再び追い払うことはできないし、超自然主義は再び呼び戻すことができない。現下の状況の危機は、歴史的発展の単純なもの、永続的なもの、真なるものをその中核として際立たせ、人間の歴史のうちで働く理性に対する信仰に基づいて、それらを信仰に提示することができる、歴史の形而上学によってのみ克服されうる。

このような一般的状況は神学においても再び反映されている。神学研究の全強調は、一般的状況の影響をうけて、その歴史学的研究のうちに存している。重要かつ独創的で、真に認識を広げる仕事は、ほとんど歴史研究からのみ生まれており、こうした仕事のみが非神学的な読者にとって理解することができ、味わうことができる。最も優れた才能の持ち主は歴史研究に向かい、そして教義学者たち自身の最も優れた業績は歴史学的に構想されたものである。教義学は数十年来洪水のように押し寄せるこうした歴史学ないし自然科学の諸成果に対する避難所にすぎない。多くの神学者たちが抱いている本来の教義学的な根本的見解とは、歴史を理解せしめ、歴史的に理解された理想の影響を

---

<sup>8</sup> Troeltsch, „Christentum und Religionsgeschichte,“ 421; GS II, 335.

<sup>9</sup> Ernst Troeltsch, Besprechung über *Die neue historische Methode*, von G. Below, und über *Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft*, von H. Rickert, in *ThLZ* 24 (1899), 375; KGA 2, 529 (資料番号 34).

身に受けることが肝要である、というものである。ひとはまさしく歴史主義の潜在的な神学（eine latente Theologie des Historismus）について語ることができる<sup>10</sup>。

資料番号 35～44 の用例に見てとれるように、historisierend の形容詞的用法は、それ以後最晩年に至るまで見出すことができるが、それについての細かい分析は後段の課題として、つぎに名詞形の Historisierung について見てみたい。

## 二

「歴史化」の名詞的用法、すなわち Historisierung の用例も、トレルチの最初期の論文や書評のなかにふんだんに見出すことができる。たとえば、「宗教の自立性」という一八九五年の論文には、「そのこと〔神概念および世界連関の内在化〕と密接に関連している自然的現実および精神的現実の歴史化」<sup>11</sup> という表現が見出されるし、一八九七年と一八九八年の論文や書評には、「あらゆる学問の近代の歴史化」<sup>12</sup>、「あらゆる学問とまた宗教学の歴史化」<sup>13</sup>、「近代的な思惟の歴史化」<sup>14</sup>、「神学の歴史化」<sup>15</sup> といった表現が用

---

<sup>10</sup> Ernst Troeltsch, „Geschichte und Metaphysik,“ *ZThK* 8 (1898): 69; KGA 1, 682.

<sup>11</sup> Ernst Troeltsch, „Die Selbständigkeit der Religion,“ *ZThK* 5 (1895), 363; KGA 1, 366 (資料番号 1).

<sup>12</sup> Ernst Troeltsch, Rezension über Gustav Claß. Untersuchungen zur Phänomenologie und Ontologie des menschlichen Geistes, *Theologische Literaturzeitung* 22 (1897), 52; KGA 2, 173 (資料番号 3).

<sup>13</sup> Ernst Troeltsch, „Christentum und Religionsgeschichte,“ *Preußische Jahrbücher* 87 (1897), 446; GS II, 361 (資料番号 5).

<sup>14</sup> Ernst Troeltsch, „Religionsphilosophie und theologische Principienlehre,“ *Theologische Jahrbuch* 16 (1898), 536; KGA 2, 274 (資料番号 4); Rezen-

いられている。とりわけ一八九八年の「神学的状況について」という論文においては、「神学の歴史化との原理的な対決」(eine prinzipielle Auseinandersetzung mit der Historisierung der Theologie)<sup>16</sup> という注目すべき表現も出てくる。さらに「神学の歴史学的方法と教義学的方法について」という一九〇〇年の重要な方法論的論文では、「われわれの全思考の歴史化」(Historisierung unseres ganzen Denkens)<sup>17</sup> が惹き起こす問題が、まさに正面から取り上げられている。以上のことから、トレルチがハイデルベルク時代からすでに、ということは彼が新進気鋭の神学者として活躍しだした頃からすでに、「歴史化」が惹き起こす深刻な思想的問題を敏感に感受していたことがわかる。

いわゆる中期のトレルチの著作においては、資料番号17～19の用例に見てとれるように、「歴史化」の概念が「心理学化」(Psychologisierung)や「相対化」(Relativierung)といった概念といわばセットにして語られている。このことは historisierend の用例でも見てとれる(資料番号37, 38参照)。

---

sion über Carl Albrecht Bernoulli. Die wissenschaftliche und die kirchliche Methode in der Theologie, *Göttingische gelehrte Anzeigen* 160 (1898), 426; KGA 2, 336-337 (資料番号6).

<sup>15</sup> Ernst Troeltsch, „Religionsphilosophie und principielle Theologie,“ *Theologische Jahrbuch* 17 (1898), 575; KGA 2, 438 (資料番号7); *ibid.*, 582; KGA 2, 450 (資料番号8).

<sup>16</sup> Ernst Troeltsch, „Zur theologischen Lage,“ *Die Christliche Welt* 12 (1898), 629; KGA 1, 689 (資料2).

<sup>17</sup> Ernst Troeltsch, „Ueber historische und dogmatische Methode der Theologie,“ *Rheinischer wissenschaftlicher Predigerverein*. N.F. 4 (1900), 92; cf. GS II, 735 (資料番号10). なお、この論文の原題は“Ueber historische und dogmatische Methode der Theologie”だったが、『著作集』第二巻に収録される際に、“Ueber historische und dogmatische Methode in der Theologie”と微修正されている。当然、中身も細かい点で加筆修正されているが、引用箇所に関しては原論文のままである。

## 三

「歴史化」の動詞的用法、すなわち *historisieren* の用例も、数は少ないが見出される。たとえば、「科学的に説明し歴史的に考察しようという精神は、すべてに手を伸ばし、宗教・芸術にまで入りこんで、今や本質的に学問的となった教養に関わるすべてのものを合理化し歴史化する」（資料番号 45）という用例がそうであり、あるいは「近代心理学、歴史主義ならびに進化論によって、倫理的規範そのものの全領域が、さまざまな事物の流れのなかにまき込まれ、歴史化された」（資料番号 47）という用例も、ほぼ同様の趣旨を表している。しかし資料番号 46 の用例は、上記の二つとは明らかに趣を異にしている。それを邦訳してみれば、「こうした意見が感じ取られる時には、歴史的研究はこれらの理念や価値を再びその母なる基盤へと連れもどし、それらを具体的、起源的、活性的な意味によって満たす。そうすることで、それらの理念や価値はもちろん現代から遠ざけられ、歴史化される。しかしまさしくその時あの分離化の過程が新しく開始され、そのようにして意味を満たされ、活性化された文化的内実が、再び歴史を超えた原理にされるのである。」というほどの意味になるが、ここにおける「歴史化」の用法は、現在分詞形にしる、名詞形にしる、あるいは過去分詞形にしる、われわれがこれまで見てきた用法とは明らかに異なった意味合いを含んでいる。だが、これについて掘り下げて論ずる前に、われわれはもう少し辛抱強く用例を洗い出しておく必要がある。

われわれにとってここで興味深いのは、接頭辞の *ent-* を伴った「非歴史化」ないし「脱歴史化」（*enthistorisieren*; *Enthistorisierung*）の用例も存在することである。たとえば、資料番号 29 の用例では、トレルチはスピリチュアリズムの代表的思想家シュヴェンクフェルトのキリスト論的教説に論及して、それは「根本的にはただ、同時代のキリスト論的教理の確立のもとで、キリストの脱歴史化を表現したものにすぎないように思われる」と述べている。トレルチのハイデルベルク時代の講義を収録した遺稿『信仰論』*Glaubenslehre* のなかには、動詞の過去分詞形 *enthistorisiert* の用例

が見出される。

だが、信仰はもっぱら時間を超越したものに属するものに向けられており、したがって、歴史的なものを脱ぎ捨てなければならない。なぜなら、時間を超越したものは、直接的に現在のなものだからである。ひとは頭を後ろ向きにしながら信じることはできない。ひとは現在のなもの、時間を超越したものに関してのみ、信じるのであって、幾千もの媒介物によって伝承された過去のなものに関しては、信じることはできない。ひとは未来に関して、また不死性に関して、信じることができる。だが、われわれが後ろ向きになるやいなや、すべてのものは苦痛に満ちた外観を呈する。イエスが神的なものの可視化にほかならず、本来的な意味での歴史的人物でないとすれば、その場合、彼は時間を超越しており、父〔なる神〕と等しいことになる。信仰はその対象を容易にイエスにおいて見いだすことができる。イエスは、あらゆる瞬間に、王として現在のであり、あらゆる祈りを聞き分ける。そして彼とともに、彼の周りに集まっている全歴史も非歴史化される。永遠が歴史的制約の中に入ってくる。そして歴史に対する信仰において、永遠を把握することが可能となる<sup>18</sup>。

この用例も、トレルチにおける「歴史化」の概念を考察する上できわめて重要な示唆を含んでいると思われるが、これについても後段の分析に委ねることにしよう。

---

<sup>18</sup> Ernst Troeltsch, *Glaubenslehre*. Nach Heidelberger Vorlesungen aus den Jahren 1911 und 1912 herausgegeben von Gertrud von le Fort, mit einem Vorwort von Marta Troeltsch (München und Leipzig: Verlag von Duncker & Humblot, 1925), 87-88; E・トレルチ, 安酸敏眞訳『信仰論』(近代キリスト教思想双書)(教文館, 1997年), 99頁。

#### 四

そこでふたたび名詞形の Historisierung に戻ると、冒頭でも言及したように、ベルリン時代のトレルチは、いまや「歴史主義」の概念を明確に「歴史化」の概念を用いて定義する。たとえば、一九二二年の「歴史主義の危機」という論文で、トレルチは「歴史主義」を次のように規定している。

それ〔歴史主義〕は十九世紀が進行するなかで生起したような、精神世界についてのわれわれのすべての知識と感覚の歴史化を意味する。われわれはここではすべてのものを生成の流れにおいて、すなわち、無限にそしてつねに新たに個性化し、過去のものによって規定されつつ、知られざる将来的なものへと方向づけられたものとして見るのである。国家、法、道徳、宗教、芸術は歴史的生成の流れのなかに解消されており、われわれにはいたるところでただ歴史的発展の構成要素としてのみ理解され得る。このことは一方では、あらゆる偶然的なものと同格的なものが個を超えた広大な連関に根差しているとの感覚を強め、過去の諸力をそのときどきの現在に引き渡す。しかしそれは他方では、それが教会的・超自然的な、それゆえに最高の権威を有するものであれ、永遠の理性的真理ないし国家、法、社会、宗教、倫理に関する理性的構成物であれ、世俗的権威とその支配形式に関係づけられた国家的教育の強制であれ、あらゆる永遠の真理を動揺させる。かかる意味での歴史主義は、事物を比較して発展史的に関係づける思考が精神世界の隅々にはじめて滲透した結果であり、これは古代や中世の思惟方式、いやそれどころか、啓蒙主義的・合理的な思惟方式からも根本的に区別される、精神世界に対する近代特有の思惟形式なのである<sup>19</sup>。

---

<sup>19</sup> Ernst Troeltsch, „Die Krisis des Historismus,“ *Die neue Rundschau* 33, I (1922), 573; KGA 15, 437-438.

このように、歴史主義はいまや「精神世界についてのわれわれのすべての知識と感覚の歴史化」として規定されるが、『歴史主義とその諸問題』のなかにもそれに対応する定義を見いだす。ここでは「歴史主義」は、「われわれの知識と思考の根本的な歴史化」(die grundsätzliche Historisierung unseres Wissens und Denkens)<sup>20</sup>、あるいはより明確に、「人間とその文化や諸価値に関するあらゆるわれわれの思惟の根本的歴史化」として規定されている。多少の表現上の相違はあるものの、その意味に大差はないといってよい。意味されているのは、事物や真理を永遠的・不変的な相において捉える静止的な思考から、すべてのものを生成の流れにおいて捉える動態的な思考への、人間の思惟ないし認識における根本的変化ないし転換であり、端的に表現すると、トレルチが最初期から問題にしてきた、人間の思惟のあのラディカルな「歴史化」(Historisierung)にほかならない。したがって、トレルチにとっての「歴史主義」とは、いみじくもF・W・グラーフが言うように、「人間の自己解釈と生活態度を根本的に変革した思惟の革命」<sup>21</sup>を意味しており、同時にかくして成立した「近代特有の思惟形式」(die eigentümlich moderne Denkform)を指している。

## 五

われわれは上で、トレルチが「歴史主義」を「人間とその文化や諸価値に関するあらゆるわれわれの思惟の根本的歴史化」として捉えていることを見たが、「歴史化」という現象をその主体と対象という観点から考察すると、まず「歴史化」される対象としては、「思惟」(資料番号4, 6, 10,

<sup>20</sup> Troeltsch, GS III, 9; KGA 16, 177.

<sup>21</sup> Friedrich Wilhelm Graf, „Ernst Troeltsch: Theologie als Kulturwissenschaft des Historismus,“ in *Theologen des 20. Jahrhunderts. Eine Einführung*, herausgegeben von Peter Neuner und Gunther Wenz (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 2002), 62.

13, 16, 21, 22, 24, 28) や「知識」(資料番号 21, 27) だけでなく、「世界像」(資料番号 11), 「世界観」(資料番号 12), 「人間観」(資料番号 19), 「人間の意識」(資料番号 25, 26), 「精神」(資料番号 45), 「学問」(資料番号 3, 5), 「神学」(資料番号 2, 7, 8, 9), 「宗教学」(資料番号 5), 「聖書」(資料番号 14), 「聖なる歴史」(資料番号 15), 「すべての絶対的なもの」(資料番号 17), 「あらゆる現実」(資料番号 18), 「古代」(資料番号 20), 「世界一般」(資料番号 26), 「歴史学的研究」(資料番号 46), 「倫理的規範の領域」(資料番号 47) などが挙げられている。逆に「歴史化」の主体ないし作用体として挙げられているのは, 「考察」(資料番号 30), 「思惟」(資料番号 33), 「思惟の方向性」(資料番号 31), 「思惟方式」(資料番号 38), 「精神」(資料番号 32), 「把握」(資料番号 34), 「カオス」(資料番号 35), 「神学の方向性」(資料番号 36), 「心理学」(資料番号 37, 43), 「宗教性」(資料番号 39), 「ダーウィン主義」(資料番号 40), 「哲学者」(資料番号 41), 「本質直観」(資料番号 42), 「西洋」(資料番号 44) などである。

以上のことは, あくまでもその用例分析に基づいて言えることであるが, しかしトレルチにおける「歴史化」の真の思想的構造と本質は, このような文献学的あるいは言語学的な作業からだけでは明らかにならない。われわれが三で示唆したように, 資料番号 46 と 48 の用例は, 西洋の近代において生じた「歴史化」という現象に立ち向かう, 人間の精神ないし思惟のある根源的な対処法を示していないであろうか。そしてそこに「歴史によって歴史を克服する」(Geschichte durch Geschichte überwinden) というトレルチの有名なモットーを解明する重要なヒントが含まれていないであろうか。しかしこの点に迫るためには, われわれは文献学的あるいは言語学的な作業を超えて, さらに哲学的ないし思想的な解析作業へと進んでいかなければならない。

## 六

トレルチにおける「歴史化」の概念は, 一見単純そうに見えるが, 実際は

必ずしもそうではない。一般的に言えば、「歴史化」は近代に特有の現象であり、基本的には、あらゆるものを巻き込み、生成の流れのなかですべてのものを捉える思考様式であるが、しかしそれ以上の意味をも包含している。トレルチはある箇所、「単なる歴史化」(die bloße Historisierung)についても言及しているが(資料番号23)、彼にとっての「歴史化」の概念は、必ずしもそう単純なものではない。周知のように、トレルチは神学者としても歴史哲学者としても、単に過去を回顧するだけではなく、過去と現在とを関連づけることでそれらの相互接触をはかり、「本来の究極的基準、すなわち同時に未来形成を未知の無限な未来へと駆り立てていく基準」<sup>22</sup>を形成しようとした。キリスト教本質論に関する彼の有名な「本質規定は本質形成である」(Wesensbestimmung ist Wesensgestaltung)<sup>23</sup>という言葉は、本質規定は単なる歴史的抽象化ではなく、同時に「理想概念」(Idealbegriff)でもなければならぬことを言い表したものであった。したがって、本来の意味における「歴史化」とは、現在という視点から過去を振り返り、すべてを生成の流れのなかで捉えるだけではなく、そこから翻って現在を逆照射し、そこからさらに未来を展望するという二つの方向性を有し、そして現在を支点にして過去と未来を動的に媒介する作用を蔵してはいないだろうか。資料番号46の用例を前後の文脈も含めて参照すると、そのように言えるのではなからうか。

すなわち、歴史研究の場合には、抽象化し、教条化し、合理主義化し、スコラ主義化して空虚になった理念や価値を、「これらを再びその母なる基盤へと連れもどし、それらを具体的、起源的、活性的な意味によって満たす。そうすることで、それらの理念や価値はもちろん現在から遠ざけられる。」こうして「歴史化」された理念や価値は、一時的に現在というコンテクストからは切り離されることになるが、本来的な意味を呼び覚まされたそれらの理念や価値は活性化し、再び現在という文脈のなかで、将来をも

<sup>22</sup> KGA 16, 371.

<sup>23</sup> Ernst Troeltsch, „Was heißt »Wesen des Christentums«?“, in GS II, 431.

見据えた形で生かされることになる。そうすることで、それらの理念や価値は「再び歴史を超えた原理にされるのである」。この反転の局面こそ、トレルチが「非歴史化」ないし「脱歴史化」という用語で言い表そうとした事態ではなかろうか。「非歴史化」ないし「脱歴史化」ということは、「歴史化」の単なる否定ないしそこからの超脱ではなく、むしろ「歴史化」した人間精神がその歴史的思惟を駆使して、「歴史化」という西洋近代の不可避のプロセスないし現象を、乗り越えて行こうとする働きをも含意しているのではなかろうか。Enthistorisierungあるいはenthistorisierenのent-、つまり「非歴史化」ないし「脱歴史化」の「非」あるいは「脱」は、歴史的に作用する近代精神の、自己超克な働きを示唆していないであろうか。すなわち、「歴史化」によって水平化され相対化された精神が、ふたたび永遠性と普遍性を獲得するために自己へと再帰する働きと道程を蔵しているのではあるまいか。

## むすびに

ハルトムート・ルディースはトレルチの歴史主義を「反省的な歴史主義」(reflexiver Historismus)<sup>24</sup>と名づけ、トゥルツ・レントルフはそれを「反省された歴史主義」(reflektierter Historismus)<sup>25</sup>と言い替えているが、トレルチにおける「歴史化」の概念は、われわれの分析からも明らかになっ

---

<sup>24</sup> Harmut Ruddies, „Geschichte durch Geschichte überwinden.“ Historismuskonzept und Gegenwartsdeutung,“ in *Die Historismusdebatte in der Weimarer Republik*, herausgegeben von Wolfgang Bialas und Gérard Raulet (Frankfurt am Main: Peter Lang, 1996), 198-217, hier 204.

<sup>25</sup> Trutz Rendtorff, „Geschichte durch Geschichte überwinden. Beobachtungen zur methodischen Struktur des Historismus,“ in *Troeltsch Studien*. Neue Folge I: »Geschichte durch Geschichte überwinden«: Ernst Troeltsch in Berlin, herausgegeben von Friedrich Wilhelm Graf (Gütersloh: Gütersloher Verlaghaus, 2006), 285-325, hier 298, 303.

たように、たしかにレントルフが言うような「再帰構造 (=反省の構造)」(Reflexionsstruktur)<sup>26</sup>を蔵しているように思われる。われわれの限られた考察からはまだ確定的なことは言えないが、少なくとも以下の四点だけは確認できる。すなわち、トレルチにおける「歴史化」の概念は、

- ①すべてのものを歴史的に成ったものであると捉える、その「捉え方」
- ②過去へのまなざしと同時に将来をも見据えるという「二方向的なあり方」
- ③ロマン主義に「起源」をもち、近代に特有の「現象」・「世界観」
- ④歴史を超えた原理を生み出すために必要なことであり、最終的にはわれわれが意志をもって「決断」する必要を迫られること

を含意している。

本稿において明らかになった知見をもとに、引き続き研究を続けて、トレルチの遺言とも言うべき「歴史によって歴史を克服する」というモットーの意味を解明することは、われわれが是非ともなさねばならぬ最重要課題と言えるであろう。

## 資料：トレルチにおける「歴史化」の概念の用例

### (1) 名詞 Historisierung

1 KGA 1, 365-366: Die Selbständigkeit der Religion (1895-1896)

Ich habe daher in der zweiten Gruppe die auch von einer idealistischen Grundanschauung und einer allgemeinen Anerkennung der Religion aus zu erhebende Frage zu beantworten gesucht, ob innerhalb der Entwicklung der Religion die von uns als abschließende und erschöpfende Selbstoffenbarung Gottes betrachtete christliche Frömmigkeit mit den großen, überall herrschenden und durch den Erfolg gerechtfertigten

---

<sup>26</sup> Rendtorff, „Geschichte durch Geschichte überwinden. Beobachtungen zur methodischen Struktur des Historismus,“ 298.

Denkrichtungen zusammenbestehen könne, aus denen verschiedene sehr bedeutende Denker ihr direkt oder indirekt entgegenstehende Abschlüsse zu ziehen sich genötigt glaubten. Es handelt sich hierbei einerseits um die fortschreitende Immanenzierung des Gottesbegriffes und des Weltzusammenhanges, die nur eine innerlich wirkende Einheit und Folgerichtigkeit der alles in sich tragenden Energie, aber keinen dualistischen Supranaturalismus und keine anthropomorphe Willkür kennt, andererseits um die eng damit zusammenhängende Historisierung der natürlichen und geistigen Wirklichkeit, der alles geworden, werdend und vergehend, alles im Flusse der Relativität begriffen erscheint, welche deshalb jede Annahme einer absoluten Wahrheiten und Werte begründenden geschichtlichen Erscheinung von vorneherein unwahrscheinlich findet und vor allem in einem tatsächlich aller historischen Bedingtheit unterstehenden Phänomen keine Nötigung zu jener an sich unwahrscheinlichen Auffassung finden kann. Ich glaubte dem gegenüber, wiederum in Anlehnung an sehr verschiedene Denker, ausführen zu dürfen, daß jene Immanenz, soweit ihre Annahme auf berechtigten Motiven beruht, die innere Lebendigkeit und Selbstunterscheidung Gottes von der Welt, den inneren Supranaturalismus, nicht ausschließen zu müssen scheint, und daß diese Historisierung, soweit sie nicht durch willkürliche Vorurteile sich bestimmen läßt, ein innerhalb der Gesamtentfaltung der menschlichen Geschichte zu seiner Zeit sich vollziehendes Erschließen der göttlichen Lebens- und Liebestiefe, die Offenbarung einer endgiltigen Wahrheit nicht unmöglich mache, endlich daß die Eigenart des christlichen Frömmigkeitsprinzips gegenüber aller nichtchristlichen Frömmigkeit trotz aller historischen Bedingtheit und aller Analogien diese Anerkennung für sich fordern könne.

2 KGA 1, 689-690: Zur theologischen Lage (1898)

Das erstere müßte zunächst in einer ganz andern Weise gelöst sein, als das thatsächlich der Fall ist, ehe von dem letztern die Rede sein könnte. Daher bewegt sich der Streit auch nur um ganz allgemeine, rein wissenschaftliche Fragen, die für die praktische Unterweisung der zukünftigen Geistlichen nicht von unmittelbarer Bedeutung sind. Es handelt sich nur um eine prinzipielle Auseinandersetzung mit der Historisierung der Theologie, mit dem Geist der psychologischen Analyse und des entwicklungsgeschichtlichen Relativismus, aus dem diese hervorgegangen ist. Es gilt, die allgemeinen religionsgeschichtlichen Methoden, denen wir außerhalb des christlichen Gebietes alle Erfolge verdanken, und denen auch das Maß geschichtlichen Verständnisses, das wir auf christlichem Gebiet besitzen, teils willig, teils widerwillig verdankt wird, ohne jeden Vorbehalt anzuwenden und zu sehen, was dabei herauskommt, eine Aufgabe, deren Lösung von der Dogmatik der Schule Ritschls überall im Keime erstickt wird. Es gilt aber auch, die in dieser historisch-analytischen Anschauung enthaltenen prinzipiellen Gedanken und Folgen sich klar zu machen und das Interesse des religiösen Lebens gegen einseitige, irreligiöse oder skeptische Folgerungen aus diesen Gedanken sicher zu stellen, eine Aufgabe, deren Lösung für jene Dogmatik überflüssig ist, weil für sie der Inbegriff von Methoden und Anschauungen nicht existirt, aus dem diese Gefahren hervorgehen. Sie hat nur die Abwendung von der Spekulation apologetisch ausgenutzt, aber sie hat nicht die Zuwendung zu den historisch-analytischen Prinzipien der Geisteswissenschaften mitgemacht. Sie ist daher - für eine wissenschaftliche Dogmatik - ungewöhnlich frei von wissenschaftlichen Sorgen, aber auch unfähig, den aus der Gesamtentwicklung sich ergebenden wissenschaftlichen Problemen zu begegnen.

3 KGA 2, 173: Rezention (1897) — Gustav Claß. Untersuchungen zur Phänomenologie und Ontologie des menschlichen Geistes (1896)

Bei der ganzen Untersuchung ist noch der große Unterschied besonders zu betonen, der ihre moderne Durchführung von analogen antiken Bemühungen unterscheidet, daß es sich nämlich dabei für uns nicht wie jene lediglich um einen einfachen, immer gleichen Inhalt, sondern entsprechend der modernen Historisierung aller Wissenschaft um eine Fülle mannigfacher, geschichtlich sich entwickelnder und kreuzender Inhaltssysteme handelt, woraus die weitere Frage nach dem Verhältnis der verschiedenen geschichtlichen Geistesinhalte zur Einheit des Geistes entsteht.

4 KGA 2, 274: Religionsphilosophie und theologische Principienlehre (1897)

Der Vortrag *Harnack's*, der wenigstens einen Theil der aus der Historisierung des modernen Denkens für die Würdigung des Christenthums sich ergebenden Probleme ins Auge fasst, liegt in 4 A. vor. Die Werke, die die Stellung des Christenthums in der Geschichte durch Konstruktion einer spezifisch-christlichen Offenbarung sichern und hierbei den älteren dogmatischen Methoden folgen, bleiben dem Ref. über Dogmatik vorbehalten.

5 GS II, 361: Christentum und Religionsgeschichte (1897)

Die Verödung und Versandung des geistigen Lebens, die fortwährende Abnahme sittlicher Kraft und religiösen Ernstes, die im Genuß immer neu nach Begierde verschmachtende Abstumpfung müssen zeigen, wohin wir auf diese Weise trotz aller äußeren Fortschritte kommen, und daß ein innerweltliches vollendetes Kulturglück das täuschendste von allen Trugbildern ist. Dann wird man auch wieder

auf unseren besten geistigen Besitz zurückgreifen und von ihm aus die wissenschaftlichen Fortschritte zu verwerten wissen. Dann werden auch die schweren Gefahren, die die Historisierung aller Wissenschaft und auch der Religionswissenschaft mit sich bringt, leichter gehoben werden können, als das jetzt der Fall ist.

6 KGA 2, 336-337: Rezension (1898) — Carl Albrecht Bernoulli. Die wissenschaftliche und die kirchliche Methode in der Theologie (1897)

Bernoulli sieht den eigentlichen Grund aller theologischen Wirren in der Vermengung zweier widersprechenden Grundrichtungen, die doch von den meisten Theologen irgendwie zusammengezwungen werden und deren Vermischung sowohl die Verachtung der Theologie bei den Nicht-Theologen als die Kämpfe innerhalb der Theologie bewirkt. Auf der einen Seite steht die *wissenschaftliche Methode* mit ihrer Forderung der Voraussetzungslosigkeit, der gemäß man an herrschenden Ueberlieferungen nicht bloß herumflicken darf, sondern vielmehr ihr Recht prinzipiell untersuchen muß, die nicht bloß gegen ihren vorgefundenen Stoff, sondern auch gegen ihre daran erarbeiteten Resultate sich kritisch verhält und daher nie ein endgültiges Resultat gefunden zu haben meinen darf, die insbesondere unter dem Einfluß der Historisierung des modernen Denkens dem historischen Relativismus huldigen muß und keine fertigen, endgültig erreichten oder der Bedingtheit und Veränderlichkeit entnommenen Größen kennt. Von dieser Methode ist die gegenwärtige Theologie mannigfach geleitet, und soweit sie ihr folgt, hat sie wissenschaftlich haltbare Resultate hervorgebracht. Aber sie ist nirgends konsequent durchgeführt worden. Denn auf der anderen Seite steht das mit der kirchlichen Praxis von selbst gegebene Interesse an einer für immer fertigen, unüberbietbaren, dem Fluß und der Bedingtheit des geschichtlichen Lebens ent-

nommenen Religionswahrheit oder doch die Notwendigkeit, das in der Kirche verkündigte Christentum unter diesem Gesichtspunkt zu beurteilen. Daraus entspringt eine *kirchliche Methode*, .....

7 KGA 2, 438: Religionsphilosophie und principielle Theologie (1898)

Die Einwirkung der historischen und entwicklungsgeschichtlichen Betrachtung auf die Theologen ist im Ganzen eine mehr unbewusste, von Fall zu Fall erfolgende und vor allem in der historischen Einzelforschung zu Tage tretende. Doch beginnt nach und nach die principielle Bedeutung der Lage für Theologie und Religionsforschung deutlich zu werden. Das seiner Hauptmasse nach an anderem Ort zu besprechende Buch von *Bernoulli* ist aus dieser Empfindung ganz und gar hervorgegangen und ist als Veranschaulichung der Lage von hohem Interesse. Er leitet mit Recht von den Einwirkungen Hegels, zu denen nur die der modernen entwicklungsgeschichtlichen Forschung auf allen Gebieten hätten hinzugenommen werden müssen, eine unaufhaltsame Historisierung der Theologie ab, die nunmehr in die allgemeine Religionsgeschichte unwiderruflich hineingezogen ist. Er kennt auch die principiellen Consequenzen der Lage, die Unmöglichkeit, das Christentum doch wieder zu isoliren und als absolute und für immer fertige Religion zu construiren.

8 KGA 2, 450: Religionsphilosophie und principielle Theologie (1898)

Die Anwendung des Entwicklungsgedankens auf die Religionsgeschichte überhaupt und auf das Christentum insbesondere führt naturgemäß zu den Fragen nach dem Rechte, die Absolutheit des Christentums zu behaupten, nach den Grenzen, innerhalb deren Bewegung und Entwicklung des Christentums zugegeben werden kann, und nach der Bedeutung der Person Jesu für das sich entwickelnde christliche Prin-

cip. Diese Fragen sind trotz oder vielleicht gerade wegen ihrer Bedeutung nur in kurzen Andeutungen verhandelt worden, in denen sich aber immerhin deutlich genug verräth, dass hier die brennenden, aus der wissenschaftlichen Gesamtlage sich ergebenden Probleme liegen. *Jäger* schildert die aus die Historisierung der Theologie und ihrer Einreihung in die allgemeine Religionsgeschichte entspringende Lage, gibt deren Schwierigkeiten zu, hebt aber hervor, dass hierbei doch auch mannigfacher Gewinn für Verständniss und Leben des Christenthums zu Tage getreten sei. Vergleichendes und kritisches Studium hat den grundlegenden Unterschied des Christenthums als Religion von der aus ihm entstandenen Theologie, besonders von der durch griechische Metaphysik und griechischen Doctrinarismus verhärteten Theologie, offenbart und hat die rein religiöse, von Doctrinen, Wissenschaft und Weltanschauung noch freie Gestalt des Urchristenthums bloss gelegt. Sie hat ferner genöthigt, den Glauben an das Christenthum nicht mehr auf historische Apologetik, sondern auf die praktische Erfahrung und Bethätigung seines unmittelbar gegenwärtigen Gehaltes zu begründen. Wenn auch die Dogmatik durch die Lage ins Gedränge gekommen ist, so muss es eben einstweilen ohne Dogmatik gehen.

9 KGA 2, 629: Religionsphilosophie und principielle Theologie (1899)

Ganz anders ist die von *Dorner* gegebene Charakteristik der Theologie. Er geht aus von der vorliegenden Thatsache, dass die Theologie von der Untersuchung der Principien und der metaphysischen Grundprobleme sich auf die Historie zurückgezogen habe, und beurtheilt diese Historisierung nicht in dem Lichte ihrer radicalen Folgen, sondern als Ausfluss einer Vereinigung modern empiristischer und kirchlich-positivistischer Neigungen. Indem man sich an das gegebene Historische halte, erkenne man das gegebene kirchliche

Christentum als Objekt der Theologie und den Dienst für die Kirche als Aufgabe der Theologie an, wobei freilich durch bedingte Zulassung der allgemein historisch-kritischen Methoden lauter Halbheiten entstehen, historische Untersuchungen, bei denen eine durch innere Erfahrung oder sonstwie begründete dogmatische Norm die Ergebnisse der Untersuchung mitbestimmen darf, sofern die historische Forschung sich nicht dem Gleichgültigen, Antiquarischen und Specialistentum zuwendet.

10 GS II, 735: Ueber historische und dogmatische Methode in der Theologie (1900)

Recht, Moral, Gesellschaftslehre, Staatslehre, Aesthetik sind von ihr aufs Tiefste ergriffen und historischen Gesichtspunkten und Methoden unterstellt worden. Ob diese Historisierung unseres ganzen Denkens als ein Glück zu empfinden ist, das ist hier nicht die Frage. Darüber kann man in Nietzsches glänzender Abhandlung Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das handelnde Leben beherzigenswerte Betrachtungen lesen. Jedenfalls können wir nun einmal nicht mehr ohne und gegen diese Methode denken und müssen wir alle unsere Forschungen über Wesen und Ziele des menschlichen Geistes auf sie aufbauen.

11 GS IV, 537: Der deutsche Idealismus (1900)

Mit alledem hat er einerseits in Deutschland eine materialistische oder skeptische Wendung des Denkens, wie sie bei Hume, Voltaire, Diderot und Condillac sich vollzog, unmöglich gemacht, andererseits eine Befruchtung der Gesamtanschauung aus der Geschichte und eine Historisierung des Gesamtweltbildes herbeigeführt, die von den Voraussetzungen der westlichen Aufklärung aus erst mit der sozialen Statik und Dynamik Comtes und mit der philosophischen Ausdeutung des

Darwinismus möglich wurde.

12 GS IV, 552: Der deutsche Idealismus (1900)

Damit vollzieht sich eine durchgängige Historisierung der ganzen Weltauffassung und eine Veränderung der historischen Methode, die nicht mehr bloß auf natürliche Erklärung ausgeht, sondern auf Nachfüllen und Nachschaffen der Ereignisse im psychologischen Verständnis, nichtmehr bloß auf Kritik der Ueberlieferung nach Möglichkeit und Wahrscheinlichkeit des Ueberlieferten, sondern auf psychologische Erklärung des Werdens und der Entwicklung der Ueberlieferung selbst.

13 GS IV, 573: Der deutsche Idealismus (1900)

Die Bedeutung der Romantik ist demgemäß für die allgemeine Kultur eine überaus mannigfaltige und eindringende. Doch ist ihr Fortschritt in der Entwicklung des *Gedankens* einfach zu bezeichnen. Er liegt in der Vollendung der Historisierung des Denkens, womit die universale Ausweitung des Horizonts und die Betonung der Bedeutung des Christentums für unser geistiges Leben von selbst gegeben war. Zwar fehlte ihr noch die Exaktheit und Nüchternheit der Forschung, aber sie brachte die virtuose Anempfindung an alle, auch die fremdesten Gebilde und die historische Gerechtigkeit, die jede Zeit und jeden Menschen an den eigenen Voraussetzungen mißt, den Sinn für das Unbewußte und Halbbewußte und die in dieser dunklen Region arbeitenden Großmächte der Geschichte. Vor allem aber hat sie damit die älteren Begriffe der *lex naturae*, des *common-sense*, der angeborenen Normen und der abstrakt konstruierbaren Vernunftwahrheit endgültig aufgelöst, wie die Aufklärung zuvor den mit diesen Begriffen zusammengespannten Begriff einer supranaturalen, kirchlichen Autor-

itätsnorm aufgelöst hatte.

14 GS II, 412: Was heißt „Wesen des Christentums“? (1903)

Daran wird nichtsgeändert, wenn man auch, wie die heutige Bibelforschung auch der Positiven, das Inspirationsdogma preisgibt und in der Bibel bloß einen menschlichen Bericht über übermenschliche Tatsachen und Wahrheiten sieht. Es ist bez ihnen ja überall dafür gesorgt, daß die Vermenschlichung oder Historisierung der Bibel sich nicht auf die Historisierung des Inhalts erstreckt.

15 Das Historische in Kants Religionsphilosophie (1904), 132

Alles das ist nicht die typische Tendenz des Rationalismus, sondern die notwendige und selbstverständliche Folge der Historisierung der Heiligen Geschichte. Das ist kein Mangel an historischem Sinn, sondern im Gegenteil ein sehr feines Gefühl für die Wirkung des historischen Denkens auf absolute Wahrheiten. Lessing ist dann freilich von hier aus den typisch-rationalistischen Weg gegangen, die Vernunftreligion überhaupt und unbedingt von der Geschichte zu emanzipieren, indem er an die Lockesche Erziehung des Menschengeschlechtes durch anticipation der Vernunftwahrheit die Erwartung des evangelium aeternum knüpft, wo die reine Vernunftreligion ohne jede historische Stütze und Beimischung rein aus eigener Kraft die Gemüter erfüllen wird.

16 Das Historische in Kants Religionsphilosophie (1904), 134

Kants Lehre nimmt negativ und positiv zu einer universalen, wenn auch noch sehr mageren, Religionsgeschichte Stellung. Die Einsatze für die Kritik treten dabei von selbst zu Tage. In der Hauptsache aber ist eine Kritik nicht nötig. Hier liegt alles völlig klar und

zwingend. Kants Lehre ist weit entfernt von dem ihr gewöhnlich zugeschriebenen geschichtslosen Sinne, sie zieht vielmehr geradezu die Konsequenz der beginnenden Historisierung des menschlichen Denkens und der Einverleibung der heiligen Geschichte in die allgemeine Religionsgeschichte. Es ist der Bruch der modernen Welt mit dem auf der urchristlichen Apologetik beruhenden Wissenschaftssystem des Katholizismus. Wer diesen Bruch vollzieht, wer die Quasi-Historie des Wunders aufgibt und die reale Historie der Kritik und analogischen Rekonstruktion anerkennt, für den bleibt nichts anderes übrig als die Ausarbeitung und Vertiefung des Kantischen Satzes: „Das Historische dient nur zur Illustration, nicht zur Demonstration.“

17 KGA 7, 479: Protestantisches Christentum und Kirche in der Neuzeit (1909)

Aber da ist es nun das Charakteristische der neuen geistigen Welt, daß sich in ihr neben dem dogmatisch-absolutistischen Geiste ein historisch-relativistischer, eine historische Bibelauslegung und eine historisch-kausal-erklärende und relativ nach Zeitumständen bewertende theologische Historie ausbildete. Zwar diente sie zunächst, ihres wahren Kurses noch nicht bewußt, scheinbar bloß der Ausschiffung entbehrlichen oder unerträglichen dogmengeschichtlichen Ballastes, und wo sie weiter ging, wurde sie bald an dogmatische Fesseln und Stricke gelegt. Aber sie hat sich mit ihrer Konsequenz einer Historisierung und Relativierung alles Absoluten, der Vernatürlichung alles Wunders, als eines der schwierigsten Probleme bald genug gegen die Dogmatikselbst gewendet. Damit empfangt die Dogmatik neben der Aufgabe der Vermittlung mit der neuen Metaphysik und dem neuen Weltbild auch noch die viel schwerere der Vermittlung mit dem historisch relativierenden und vernatürlichenden Denken.

18 GS II, 755: Zur Frage des religiösen Apriori (1909)

Das allein ist meine Problemstellung, und das ist zugleich, wie ich meine, die Problemstellung der allgemeinen geistigen Situation von heute, die in der Historisierung, Psychologisierung und Relativierung alles Wirklichen ihre Erkenntnistriumphe erlebt, aber eben damit sich den Zugang zu allem Normativen und Objektiven abschneidet und daher von einer steigenden Sehnsucht nach dem Absoluten, und das heißt eben nach Religion, erfüllt ist. Diese allgemeine Lebensfrage der Gegenwart ist es, die mich beschäftigt; nicht das Bedürfnis, die systematische Theologie an die Methoden der Wissenschaft überhaupt anzuschließen und den anderen Fakultäten ebenbürtig zu machen.

19 Die Bedeutung der Geschichtlichkeit Jesu für den Glauben (1911), 35

Darüber darf man sich nicht beklagen. Es ist das doch nicht eine auf die historischen Probleme des Glaubens sich beschränkende Schwierigkeit. Der Glaube innerhalb einer wissenschaftlich gebildeten Welt ist nie unabhängig gewesen von den Einwirkungen der Wissenschaft. Er stand Jahrhunderte lang unter den Einwirkungen antiken Philosophie; er mußte sich dann messen und ausgleichen mit der die antike und christliche Philosophie von Grund aus verwandelnden Naturwissenschaft; heute kommt dazu die Historisierung und Psychologisierung unser ganzen Anschauung vom Menschen und seinem irdischen Dasein. Es ist ein Wahn, daß der Glaube Auseinandersetzung, Anpassung und Gegensatz gegenüber den jeweils als wissenschaftliche Erkenntnis sich anbietenden Anschauungen vermeiden und daß er sich unter Einziehung aller ihn in Gegensatz bringenden Positionen rein auf sich selber zurückziehen könne.

20 Deutscher Geist und Westeuropa, 215: Humanismus und Rationalismus in unserem Bildungswesen (1916)

Zunächst und zuerst steht hier wie bei aller Relativierung historischer Größen, die unseren Urgroßvätern noch als absolute Wahrheiten galten, die unausbleibliche Wirkung eines einbringenden historischen Denkens selbst. Ein solches zeigt uns freilich die ungeheure Bedeutung der Antike für das ganze Abendland und die Notwendigkeit, die Kontinuität mit ihr festzuhalten. Aber das ist dann eine sehr mittelbare Beziehung für die Reflexion und keine unmittelbare Gegenwart für das Gefühl und für den Glauben. Ein allgemeines und instinktives Gefühl von der Historisierung und Relativierung der Antike durch unsere Gewohnheit historischen Denkens und ein gang bestimmter vermenschlichender und verendlichender Einfluß gerade der heutigen gymnasialen Darstellung der Antike selbst wird [jedenfalls] unter uns nicht bestritten können.

21 KGA 16, 176-178; GS III, 9: Der Historismus und seine Probleme

So gesehen, bedeutet das Problem allerdings eine Grundfrage unseres heutigen geistigen Lebens, nichts Geringeres als *das Problem des sogenannten Historismus* überhaupt, d. h. der aus der grundsätzlichen Historisierung unseres Wissens und Denkens sich ergebenden „Vorteile und Nachteile“ für die Bildung eines persönlichen geistigen Lebens und für die Schaffung der neuen politisch-sozialen Lebensverhältnisse. Die Historisierung folgte im 18. Jahrhundert langsam der Naturalisierung oder besser Mathematisierung des Denkens und erhob sich unter dem Zwang praktischer Bedürfnisse zusammen mit dem modernen Staat und den Aufgaben seines Selbstverständnisses und seiner Selbstrechtfertigung, um dann mit der Romantik mächtig emporzuschießen und das moderne Denken grundsätzlich zu bestimmen, ja in Gestalt des

allgemeinen Entwicklungsbegriffes auch unser Naturbild in seinen Bann zu ziehen. Sie wurde die leitende Macht der Weltanschauungen, die den Dogmatismus der Aufklärung und der französischen Revolution ablösten.

22 KGA 16, 281; GS III, 102

Erst mit diesen letzterwähnten Einsichten kommen wir zur abschließenden Formulierung des uns beschäftigenden Problems. Es ist das Problem der Bedeutung und des Wesens des Historismus überhaupt, wobei dieses Wort von seinem schlechten Nebensinn völlig zu lösen und in dem Sinne der grundsätzlichen Historisierung alles unseres Denkens über den Menschen, seine Kultur und seine Werte zu verstehen ist. Das ist ganz offenkundig seit dem Bruche der Aufklärung mit dem kirchlichen und humanistischen Dogma in steigendem Maße der Fall.

23 KGA 16, 371; GS III, 178

Andererseits wird dann wieder durch die Beziehung des Vergangenen auf die Gegenwart dieses vor der bloßen Historisierung und Objektivierung bewahrt, die schließlich nur mehr die fachmäßigen Rezensionsblätter beschäftigt und durch ihren Niederschlag das Gedächtnis der Schule belastet. Immer erst in der Berührung zwischen Vergangenen und Gegenwärtigem bildet sich der eigentliche letzte entscheidende Maßstab, der zugleich die Zukunftsgestaltung in die unbekanntes endlose Zukunft hineintreibt. Es ist, wie es Kierkegaard gegen die pantheistischen Versenkungen des Einzelnen und Individuellen, des Momentanen und Verantwortlichen, in ein allgemeines Seinsgesetz oder eine allgemeine Seinfülle mit immer neuer Schärfe behauptete, der entscheidende Sprung, durch den wir in eigener Entscheidung und Verantwortung aus der Vergangenheit in die Zukunft

gelangen. Wenn Kierkegaard selbst bei diesem Sprung in ein sehr eigentümlich verstandenes, sektiererisches und asketisches Christentum sich hineinstürzte, so ist darin dann freilich noch das instinktive Bedürfnis nach absoluten Autoritäten neben allem übrigen wirksam. Aber der Sprung bleibt das Entscheidende auch für alle andern und auch wenn sein Ziel gesissenhaft erwogene, freie Synthese aller lebendigen Kulturkräfte ist. Der Sprung aber ist wie jeder Sprung nicht möglich ohne den Glauben daran, daß er zum Ziele trägt. Er stammt aus der immer sich wandelnden Kraft der Entwicklung selbst und in ihm vollzieht sich ihr Gesetz des Werdens.

24 KGA 16, 454-456; GS III, 253

Es ist hier nicht möglich und nicht nötig, diese schwierigen Theorien weiter ins einzelne zu verfolgen. Man erkennt ohne Mühe, daß es eine äußerst geistvolle, aber kühne und gewaltsame Verbindung von Kant und Spinoza ist. Die Hauptsache und das eigentlich dauernd Wirksame daran ist aber doch nur die dialektisch-dynamische Logik, durch die Hegel den verwandten Lehren von Schelling, Schleiermacher und W. v. Humboldt weit überlegen war, und die er ganz anders als der doch schließlich vor allem am moralischen Endziel interessierte Fichte wirklich in das geschichtliche Material hineinzutreiben imstande war. Daraus vor allem erklärt sich das Uebergewicht, das er über all die großen gleichzeitigen Denker errang und die ungeheure Wirkung auf das historische Denken oder besser noch auf die Historisierung des Denkens eines ganzen Menschenalters, ja bis zum heutigen Tage, wo die Wirkung geblieben ist auch bei völliger Verschollenheit ihrer Voraussetzungen. Hier kommt es vielmehr nur darauf an, einige für das historische Denken wichtige Folgesätze zu beleuchten und die Anwendung der Dialektik auf das von der empirisch-kritischen Forschung

vorbereitete Material zu erläutern.

25 KGA 16, 498; GS III, 286. Anm. 135

Im übrigen verweist auch er auf die Romantik als die Quelle des Historismus, des genetischen und organologischen Denkens, die „verführerische Vorstellung, die alles Werden als Emanation eines beharrenden Seins auffaßt, S. 101, die „Historisierung des Bewußtseins“ S. 94, wobei er den Entwicklungsbegriff Schellings als entscheidend bezeichnet S. 103.

26 KGA 16, 509; GS III, 293

Nur in dem einen Punkte zeigen sie, wie Schelling selbst, restlos den romantischen Geist: in der radikalen Historisierung des menschlichen Bewußtseins, ja der Welt überhaupt. Der Historismus ist nirgends so sehr als alles durchdringendes und tragendes Prinzip anerkannt und auf seine letzten Konsequenzen einer nur anschaulichen, überall sich einfühlenden und hingebenden Erfassung des Lebens als Leben gebracht worden.

27 KGA 15, 437-438: Die Krisis des Historismus (1922)

Es bedeutet dann die Historisierung unseres ganzen Wissens und Empfindens der geistigen Welt, wie sie im Laufe des neunzehnten Jahrhunderts geworden ist. Wir sehen hier alles im Flusse des Werdens, in der endlosen und immer neuen und Individualisierung, in der Bestimmtheit durch Vergangenes und in der Richtung auf unerkanntes Zukünftiges. Staat, Recht, Moral, Religion, Kunst sind in den Fluß des historischen Werdens aufgelöst und uns überall nur als Bestandteil geschichtlicher Entwicklungen verständlich. Das festigt auf der einen Seite den Sinn für die Wurzelung alles Zufälligen und Persönlichen in

großen, breiten überindividuellen Zusammenhängen und führt jeder Gegenwart die Kräfte der Vergangenheit zu. Aber es erschüttert auf der anderen Seite alle ewigen Wahrheiten, seien sie kirchlich-supranaturaler und darum von der höchsten autoritativen Art, seien es ewige Vernunftwahrheiten und rationale Konstruktionen von Staat, Recht, Gesellschaft, Religion und Sittlichkeit, seien es staatliche Erziehungszwänge, die sich auf die weltliche Autorität und ihre herrschende Form beziehen. Der Historismus in diesem Sinne ist die erstliche Durchdringung aller Winkel der geistigen Welt mit vergleichendem und entwicklungsgeschichtlich beziehendem Denken, die eigentümlich moderne Denkform gegenüber der geistigen Welt, die von der antiken und mittelalterlichen, ja auch der aufgeklärt-rationalen Denkweise sich grundsätzlich unterscheidet.

28 KGA 15, 554: Die Zufälligkeit der Geschichtswahrheiten (1923)

Aber wenn das die Wirkung der Historie im deutschen Denken vor allem ist, so steht es darum im Auslande doch nicht viel besser. In Deutschland haben wir in der Wissenschaft als Frucht von alledem den quellenkritischen historischen Realismus erhalten, der immer mehr dem Spezialistentum und der exakten Methode sich zuwendet, damit aber den Relativismus im Grunde nur steigert; daneben ein Literatentum, das mit den von der Wissenschaft erarbeiteten Erkenntnissen überlegen zu spielen meint und sie bald zu Utopien, bald zu skeptisch-geistreichen Spielereien und Synthesen verwendet. In dem wesentlich von Aufklärung und Positivismus beherrschten Westeuropa ist aber doch die allgemeine Historisierung unseres Denkens und unseres Weltbildes schließlich nicht weniger durchgedrungen. Die Grundlagen der Historisierung sind hier andere, aber die Wirkung ist recht ähnlich. Hier hat man die romantischen Individualitäts-, Totalitäts- und Entwicklungsbe-

griffe in der Hauptsache abgewiesen und statt dessen sich an reine kausale Konstruktion der Geschichte nach Naturgesetzen oder Analogien von Naturgesetzen gehalten. Dadurch ist die Geschichte hier zur Soziologie geworden.

## (2) 名詞 Enthistorisierung

29 GS I, 882: Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen

Vor allem ergab sich ihm hieraus die mit nichts Kreatürlichem zu befleckende Göttlichkeit Christi, dessen menschlicher Leib gleichfalls schon von Beginn der Schöpfung ein übernatürliches und geistiges Fleisch gewesen sein soll. Dies wunderliche Dogma Schwenkfelds, das mit Spekulationen der alten patristischen Mystik zusammenhängt und den spiritualistischen Heilsvorgang gleichzeitig zu einem substantiellen macht, sollte im Grunde nur die Enthistorisierung Christi ausdrücken unter gleichzeitiger Aufrechterhaltung des christologischen Dogmas.

## (3) 現在分詞 historisierend

30 KGA 1, 546: Die historischen Grundlagen der Theologie unseres Jahrhunderts (1895)

Die Bedeutung dieser ganzen neuen, darart in die Unterrichtsinstitutionen übergegangenen Bildung faßt sich für die Theologie dahin zusammen, daß ihr Gottesbegriff damit im innersten verwandelt, lebendiger, tiefer und reicher, aber auch an den Rand des Pantheismus geführt wurde, daß ihre historisch-biblischen Grundlagen durch die neue evolutionistische und historisierende Betrachtung vollständig neuen Forschungsmethoden unterworfen und dabei von Grund aus verändert wurden, daß schließlich die christliche Ethik mit einem mächtigen gegensätzlichen Ideal, dem der ästhetisch-innerweltlichen Ethik des neuen Humanismus, zu ringen hatte.

31 KGA 2, 111: Religionsphilosophie und theologische Principienlehre (1896)

Die Antrittsrede *Hüring's* handelt von dem brennenden Problem, das durch die historisierende und entwicklungstheoretische Richtung des gegenwärtigen Denkens wie für alle idealen Ueberzeugungen so auch für die Religionen gegeben ist, dem Problem absoluter Werthe im Gegensatz zu dem aus unserem entwicklungsgeschichtlichen Denken folgenden Relativismus.

32 GS II, 336: Christentum und Religionsgeschichte (1897)

Von der anderen Seite nötigte aber auch die prinzipielle Untersuchung über Wesen und Wahrheit religiöser Erkenntnisse, die geschichtliche Mannigfaltigkeit der Religionen im allgemeinen ins Auge zu fassen. Der historisierende Geist des modernen Denkens hat Philosophen wie Theologen auf allen Gebieten zu geschichtlichen Betrachtungen gezwungen und das frühere, einfacher verfahrenende, rein logisch-spekulative Verfahren beseitigt. So hat sich von allen Seiten der Ring religionsgeschichtlicher Betrachtung um das Christentum geschlossen.

33 GS II, 361: Christentum und Religionsgeschichte (1897)

Das Dogma vom Kulturfortschritt, der Kulturoptimismus, beherrscht die Meinung des Tages und in seinem Lichte werden alle wissenschaftlichen Errungenschaften angesehen. Man zieht aus der von unserer großen Epoche eröffneten Periode historisierenden Denkens eifrig die Konsequenz des Relativismus, aber nur um die bisherigen idealen Mächte und besonders das Christentum, zu entwerten, während man zugleich ruhig an den Fortschritt und ein absolutes Kulturglück der Zukunft glaubt.

34 KGA 2, 529: Rezention (1899) — Georg von Below. Die neue historische Methode (1898); Heinrich Rickert. Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft (1898)

Wie diese Probleme für die Bildung unserer gesamten Weltanschauung immer bedeutsamer geworden sind und daher ein lebhafter Kampf um das Wesen und die Ziele der historischen Methode entbrannt ist, so haben sie auch für die Theologie eine grundlegende Bedeutung, einmal in Bezug auf die Methode und Unabhängigkeit religionsgeschichtlicher Forschung, die von jeder „naturwissenschaftlichen“ Methode der Historie aufs äußerste bedroht wird, andererseits in Bezug auf die aus einer historisierenden Auffassung erwachsende Schwierigkeit für die Gewinnung religiöser Normwahrheiten. Im theologischen Jahresbericht habe ich daher diesen Fragen eine besondere Rubrik gewidmet.

35 GS IV, 574: Der deutsche Idealismus (1900)

Ihr wichtigster Erbe wird daher neben den von ihr befruchteten historischen Einzelwissenschaften der Geschichtsphilosoph und der Ethiker, der die Fülle dieser Probleme zu bewältigen und in Verbindung mit der idealistischen Metaphysik aus diesem historisierenden, funkelnden Chaos wieder allgemeine Normen und Ziele herzustellen strebt.

36 GS II, 387: Was heißt „Wesen des Christentums“? (1903)

An Stelle der Dogmatik tritt, unendlich einfacher, wirksamer und überzeugender, die historische Darstellung des Evangeliums und seiner Fortwirkungen als des Wesens des Christentums, und Harnacks Schrift ist gewissermaßen das symbolische Buch für die historisierende Richtung der Theologie.

37 Das Historische in Kants Religionsphilosophie (1904), 33

Man sieht, es ist der Übergang von den reinen Vernunftprinzipien zur konkreten Wissenschaft mit ihren Bestandteilen des bloss Thatsächlichen. Ein Gleiches musste er aber auch irgendwie für die historischen Wissenschaften in Aussicht nehmen. Hier vollzieht den Übergang auch in der That die „Anthropologie“, die ja nichts anderes als vergleichende historisierende Psychologie ist. Dabei steht freilich für Kant von vornherein fest, dass diese Anthropologie und Psychologie nie im gleichen Sinne Anwendung der apriorischen Grundsätze, der Metaphysik der Sitten, werden kann, wie die angewandte Naturwissenschaft eine solche der metaphysischen Anfangsgründe der Naturwissenschaft ist, ja dass sie bei aller Begründung auf das Kausalitätsprinzip nie strenge Wissenschaft wie die Naturwissenschaft werden kann.

38 Psychologie und Erkenntnistheorie in der Religionswissenschaft (1905), 14

Gegründet auf die breite des Anschauungsmaterials, wie es die moderne historisierende und empirische Denkweise zusammengetragen hat, und ausgerüstet mit den feinen Generalisationen psychischer Vorgänge, die die moderne Psychologie aus zahllosen Einzelbeobachtungen und Experimenten herausgearbeitet hat, ist das Buch typisch für die großen Leistungen, aber auch für die Grenzen der modernen Religionspsychologie. Es ist daher das zweckmäßigste, an dieses Meisterwerk die weitere Erörterung des uns hier beschäftigenden Problems anzuknüpfen.

39 GS IV, 604: Die Restaurationsepoche am Anfang des 19. Jahrhunderts (1913)

Es sind diese Einwirkungen und die alten noch fortbestehenden

Kreise des Pietismus, verstärkt durch die romantische Religiosität und die historisierende Religiosität der großen erschütternden Freiheitskämpfe, aus denen in Frankreich, der Schweiz, den Niederlanden, Deutschland und Skandinavien zahlreiche Erweckungen und Bekehrungen hervorgingen; sie ergriffen zunächst den Pfarrstand und drangen von diesem aus in die Gemeinden, bisweilen freilich noch mehr in die regierenden Kreise vor.

40 KGA 16, 442; GS III, 241. Anm. 104

Auch Comtes Lehre von den drei Stadien ist nicht ohne dialektischen Einfluß zustande gekommen, ebenso Spencers Evolutionstheorie von der beständig gesteigerten Desintegration und Integration innerhalb der agnostischen Substanzeinheit; nicht einmal der historisierende Darwinismus mit seinen Gegensätzen von Anpassung und Ausmerzung kann sie ganz entbehren.

41 KGA 16, 310; GS III, 123

Es ist bekannt, daß Renan aus diesem Sachverhalte eine grenzenlose Skepsis gerade als Folge des historischen Denkens gefolgert hat, und daß gerade seichte Historiker und historisierende Philosophen von jener Kunst, mit billigen Mitteln zu Geistesreichtum und Tiefe zu gelangen, reichlich Gebrauch gemacht haben. Aber auch für die Großen und Größten entstanden hier die schwierigsten Fragen.

42 KGA 16, 950; GS III 646

Daher auch die Unmöglichkeit einer strikten wissenschaftlichen Entscheidung über die Richtigkeit eines solchen historischen Gedankenbaus, der näher beim Absoluten anlangt als die Physik, aber weniger geschlossene Voraussetzungen und darum Richtigkeitskriterien hat als

diese. So hat bis zu einem gewissen Grade doch Dilthey recht, so ist das Wahrheitsmoment der Dialektik behauptet, ist Simmels dunkle Rede von einem funktionalen Zusammenhang zwischen historischem Leben und wissenschaftlicher Anschauung und Formung dieses Lebens geklärt, ist der Phänomenologie der Weg geöffnet, neben ihrer mathematisierenden eine historisierende Wesensschau zu gewinnen.

43 KGA 16, 203; GS III, 31. Anm. 15

Rickert-Windelband verwandt in der Heraushebung des Individuellen, aber Gegner der Transzendentallogik und Anhänger einer nicht naturwissenschaftlichen, sondern „verstehenden“, d. h. selbst schon historisierenden Psychologie sind Dilthey und seine Schüler, auch Spranger, von denen noch die Rede sein wird.

44 KGA 16, 356; GS III 162

Empfindet man die vollen Schwierigkeiten des Problems, dann wird es quälend und man wendet sich gerne zu den Autoritäten und Offenbarungen der Kirchen zurück, wie es alte und neue Romantiker aus sehr begreiflichen Gründen getan haben und wieder tun werden, oder man wendet sich von dem historisierenden Abendland überhaupt ab zu dem geschichtslosen Orient, seiner Mystik und seinem Nirwana, wie das Schopenhauer unternommen hat und wie es seitdem so oft als Unterschied und Vorzug des viel tieferen Orients gefeiert wird.

#### (4) 過去分詞 historisiert

45 GS IV, 624: Das Neunzehnte Jahrhundert (1913)

Einmal aber im Gange, hat der wissenschaftlich-erklärende und der historisch-betrachtende Geist alles ergriffen und bis in Religion und Kunst hinein alles intellektualisiert und historisiert, was teilhaben will

an der jetzt wesentlich wissenschaftlichen Bildung. Die Bildung ist nicht mehr überwiegend ästhetisch, sei es klassisch oder romantisch, sondern realwissenschaftlich und historisch.

46 KGA 16, 1094; GS III, 769

Wird diese Gefahr empfunden, dann fuhr historische Forschung diese Ideen und Werte wieder auf ihren Mutterboden zurück, erfüllt sie mit dem konkreten, ursprünglichen und lebendigen Sinne, womit sie dann Freilich auch der Gegenwart entrückt und historisiert werden. Aber eben dann beginnt der Prozeß der Loslösung von neuem und wird der so erfüllte und verlebendigte Kulturgehalt wieder zum übergeschichtlichen Prinzip gemacht.

47 KGA 17, 70: Der Historismus und seine Überwindung (1924)

Durch die moderne Psychologie, den Historismus und Evolutionismus ist das ganze Gebiet der ethischen Normen selbst in den Fluß der Dinge hineingezogen und historisiert worden. Der, wie es scheint, allmächtige Trieb der Modernen zur Simplifikation und zu möglichst monistischen Deduktionen hat dazu geführt, die ethischen Normen selber von vorethischen und noch-nicht-ethischen Trieben herzuleiten, ähnlich wie man auf dem Gebiete des zur Philosophie erweiterten Darwinismus die scheinbar festen und zweckmäßigen Formen aus Kreuzungen zweckloser und formloser Zufälligkeiten herzuleiten suchte.

( 5 ) 過去分詞 enthistorisiert

48 Glaubenslehre (1925), 87-88

Der Glaube aber richtet sich nur auf das, was dem Zeitlosen gehört, und muß das Historische abstreifen. Denn das Zeitlose ist das un-

mittelbar Gegenwärtige. Mankann nicht mit rückwärts gewandtem Kopf glauben. Man kann nur glauben in bezug auf Gegenwartsgrößen und auf zeitlose Größen, nicht aber in bezug auf das durch tausend Vermittelungen überkommene Vergangene. Man kann glauben im Hinblick auf die Zukunft, auf die Unsterblichkeit<sup>ö</sup> sowie wir uns aber rückwärts wenden, bekommt alles einen gequälten Anstrich. Ist Jesus nur die Sichtbarwerdung des Göttlichen und keine eigentlich geschichtliche Person, so ist er zeitlos und gleich mit dem Vater. Der Glauben kann an ihm leicht seinen Gegenstand finden. Jesus ist in jedem Augenblick als König gegenwärtig, jedes Gebet vernehmend. Und mit ihm wird auch die ganye sich um ihn gruppierende Geschichte enthistorisiert. Das Ewige tritt in geschichtliche Schranken, und so wird im Glauben an die Geschichte die Eingreifung des Ewigen möglich.